Vol.55 『中越地震と北の国の人々…』 （平成17年1月11日）

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様方にはお揃いでよい年をお迎えのこと、拝察いたしております。

デフレ不況も峠を越えて、遅ればせながら私達小規模業界にもようやく恩恵を得ることが期待される年であります。反面、大企業のみの好景気は、資源インフレが不況を押し上げているようにも思えます。（錯覚かもしれません。）

２００５年は東京湾沿いに大規模な商業施設建設の動きが見られ、流通戦国時代を呼びそうな気配が強くなっております。

そうした昨年の暮れに、１２月２４日～２５日と新潟県長岡、山古志村を単身視察して参りました。

お昼過ぎ群馬県境のトンネルを抜けると、新潟平野は雪が舞っていました。昨日から降り始めたという雪は、総てを包み込み、一幅の美しい墨絵の様でありました。あのような大地震のあった災害地とは全く思えない、白い静かな平野の佇まいを見せて眠っているようでした。

湯沢から臨時の長岡駅行直行バスへ乗り換えると、白一色の新潟平野に黒々と一筋の跡を残して、１時間半後長岡へ着きました。ここからタクシーに乗りかえて山古志村の中腹あたりまで行くと大雪となり、村の入口は通行止となっており、厳重な警備にさえぎられ入ることが出来ませんでした。

車を迂回して長岡の山間部の新住宅団地へ入ると、床下の地盤が崩れガケ下へと落ちてなくなっている家が見られました。平野部より、山間部の村落、新しく開発された住宅地の被害が多い様でした。

今回の視察で驚いたことは、新潟県の県民性なのか、救援の人達へ　常に感謝されていることでした。とかく不満など災害ではよく聞きますが、この新潟の人々はすべてに感謝しているところが清々しかったです。

街を歩いて気が付いたことは大型店、コンビニの店が目立たず、商店街が共存していることでした。

なぜ・・・？と考え、よく見ると商店街の歩道（約５ｍ）には雪除けの大きな屋根が出ていて、この屋根が商店街を連帯化させていたのでした。運転手さんが「この国の人達は冬になると『雪降し・雪かき』と言う仕事があります。この仕事は一人では出来ません。隣組・部落で共同で行います。ですから協力心が強いのです。」と教えてくれました。また新潟は下請工場が多いのですが、復旧が早かったのは「正社員」が多かったのが一因です。」とつけ加えてくれました。

その夜は運転手さんに案内されて、魚料理の店『秀浜』で夕食となりました。マグロの中トロにブリの粗煮、地魚の盛り合わせ、ナスの田楽と妙な組み合わせになったが北の魚はみな美味でした。新発見は、にごり酒「五郎八」、清酒「菊水」で、味は極上でした。そしてさすが米と味噌汁、漬物は抜群でした。

北の国の人々は大地震そして雪・・・愚痴も言わず郷土再建に一生懸命でした。

私達の住む千葉県君津市は災害にも気候にも経済にも恵まれすぎていることを改めて実感し「天に感謝」と心に戒めて、翌日は早めに帰ることにしました。